

---

# 一月遅れのバレンタイン

奈月七瀬

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

一月遅れのバレンタイン

### 【Zコード】

N4417G

### 【作者名】

奈月七瀬

### 【あらすじ】

1ヶ月遅れでバレンタインのプレゼントだといわれ告られたのはいいけれど、相手は同性の男っていうことだよ。

(前書き)

誰でも読めるボーイズものとして書いてみました。毛嫌いせずに、一度お読みいただければ幸いです。

終業式まであと数えるほどになつた三月十四日、田渕俊也はある物を意外な人物からもらつことになる。

「あの……これ……受け取つてくれませんか」

夕暮れ時のいい雰囲気があたりを包んでいる時だつた。裏道のそのまた小さな奥の路地なのであたりには誰もいはず一人だけである。それはどう見ても俊也に対するプレゼントに違いない。綺麗にラッピングが施しており、赤いリボンが綺麗な花形に飾られている。プレゼントを贈られて嬉しくない奴なんていないと思つ。だけどこの時俊也は戸惑いの方が先に来ていた。

「どういふこと？？ なんで俺に？」

「えつ！ なんでつていわれても困るんだけど……受け取つて欲しくつて」

恥ずかしそうに顔をちょっと赤らめてそういわれても、それが女の子であれば俊也も嬉しいのだが、

「あんな、変なこと聞くけども、お前男だよな」

「うん。そうだよ」

自分の目に狂いがなかつたといふことを確信できた俊也は少し安心したもの、

「お前男なんだよな。じゃ、どうして俺にそんなプレゼントなんか渡すんだよ。俺も男だぜ。……ひょっとして、わかつて渡すのか？」

「わかつて渡すんだよ。……だって俺……」

「うそつ！ ！ わつわ――――――言つた。全部言つた。わかつたわかつたから……」

「なにがわかつたんだよ」

ジリツと一步踏み出したその男の動作と同時に、俊也は一步後ずさつた。

「「めん。ほんと俺駄目なんだ……頼むから……」」ひち来ないでくれよ。なつ頼む」

「なにが駄目なんだよ」

「だつてさお前……ひょつとしなくても……その……ほら、あれ……  
ゲ……イ？ つて奴だらつ。えつ！ 違う！？」

寂しそうな顔をして、そいつはガックリと肩を落とした。

「やつぱり……やめればよかつた」

ポツリとそれだけいうと顔を上げて、

「ごめんね。嫌な思いさせちやつたね。…今の忘れて…それじや  
涙目で無理に笑顔を作っているのが一目でわかる。言いたいこと  
だけいつて、わけのわからないままの俊也を置いてそいつは去つて  
いこうとしている。

気になつて仕方がない。それになにかこのままでは、俊也が悪い  
ことをしてしまつたように思えてならない。

小さな体を半分ぐらいたに折りたたんで、そいつはトボトボ歩いて  
いく。

「おー！ ……ちよつと待つてくれよ……」

すぐに追いついた俊也は、

「あのさ、俺小腹減つてんだ。……今度駅前に出来たペザの店行か  
ないか？ 美味いらしいんだ。どう？」

聞くまでもなくそいつは頷いていた。

なんか気持ちの悪いもの、そつ俊也は同性愛者のことを感じて思  
つていた。雑誌やテレビなどに出て来るそういう人達を見てのイメ  
ージしかなかつたからだ。

だけど実際今日の前にいるそいつを見てみると、そんな事はなか  
つた。極々普通の奴だ。

描いていたものとは違つことで、俊也の中での嫌悪感が消え去つ  
てしまつたという感じだ。

お腹をパンパンと叩いて満足そうな顔をして店から俊也は出て来

た。評判通りで、そここの店のピザは美味かつた。

「美味かつたな」

「うん。美味しかつた」

そんな感想をそいつは言つたけれど、殆ど俊也一人が食べていた。

「お前の家つて、どつちの方向？」

「ひつち側じやなくつて、反対方向なんだ」

「ふうーんつ。じゃ、俺と一緒に帰るつぜ」

黙つたままで一人は歩き出した。そこで俊也はあらためて、

「そりいえばお前の名前聞いてなかつたよな。クラスは……別だよ

な？」

その言葉を聞いたとたんに、そいつは立ち止まつてしまつた。

「酷いな。もうすぐしたら終業式だつて言つのに、憶えてないんだ。

……シヨック

「えつ……ほんと、一緒のクラスだつたつけ??」

ますますそいつは頃垂れてしまつた。

「赤居俊樹。あかいとしき俺つて、そんなに目立たないかな？ つていうよ

りも、存在感ない？」

「赤居？ 赤居、赤居。ああつ、思い出した。あの根暗の……わり

いつ

アスファルトにもしこの時穴があいていたら、俊樹は入つて出でこなかつたに違ひないだろう。

とうとう俊也も立ち止まり、俊樹の肩を叩いて、

「じめんよ。お前つてその、あんまりクラスの連中と溶け込んでないじやないか……だから……その……『ごめんな』

やつと頭を上げて、そいつは俊也を見上げた。

「いいよ。別に。俺つて自分からそう仕掛けてるといあるしな」

それが俊也にとつて不思議でならなかつた。クラスの誰とも打ち解けようとしない俊樹が、俊也には理解できない存在でありわからぬものであつた。

「あのや、お前がみんなを避けていた理由つて……その……

「うん。言いたいことわかるよ。そうだよ。自分のこの普通の人が持つていない、同性を好きになつちゃつつていうことがあったからなんだよね」

二人は、駅を過ぎ近くにある神社に入つていぐ。ここの方が話がしやすいからだつた。ちょうど奥ごとにひび、ベンチもある。

「あそこ座つて話そつか

「いいの？ 僕のこと気持ち悪いつて……いつてなかつた？」

「えつ。いつてたつけなそんなん事……まあいいじゃない」

ドカリと側にあつたベンチに腰掛け、隣へ座るよつに俊樹を促している。殆ど両端といつていい位置に一人は座つた。

「それ……、赤居つてほんとに男しか駄目なのかよ

「そうだよ。小さい時に女の子に虜められちゃつて、それ以来女の子のこと怖くなつちやつたんだ」

「そうなんだ。……でお前ひょつとしなくても俺のこと……」「ううん」

消えそうな声で、返事しているところが俊也には何故か可愛く見えてしまつた。確かに俊樹は自分より背が低いし童顔である。

「俺、家の都合で引っ越しするんだ」

「いつ」

「明後日……」

「凄え急なんだな」

「前々から話はあつたんだ。本決まりになつたのがこの間で」

一呼吸置いたあとで俊樹は、静かに語り始めた。

「名前が、同じ字があるだつた。それにお前俺のタイプだつたし……。ずっと気になつてたんだよな。だけど、こんな気持ちいたらもう一度と話してももらえないだつし……。だからずつと今まで黙つてたんだけど。引っ越しするつて聞いたから、それで俺……」「思い切つて、打ち明けたつてわけ？」

「うん。けど『めんな。気持ち思いさせちやつたんだよな。……けどよかつたかもな。……俺的にはだけどな』

へへっと笑つた顔も、結構可愛い。

「全然印象に残つてなかつた俺が、気持ち悪い奴としてだけれどお前の記憶の片隅にいられるんだもん。それだけでいいや」

「ほんとに、それだけでいいのか」

不思議そうな顔をして、俊樹は俊也の顔を覗き込んでくる。

「そんな悲しい思い出だけでいいのかよ。これからは、なにもなくつていいのか」

意外な言葉が俊也から飛び出してきたので、俊樹の目は見開かれ驚きの表情を表わしている。

「俺は、お前の思いには答えてやることは出来ないけど、それでも友達としてならいいじゃないか。そうだね。違うか

「俺はそれで嬉しいけど、お前がさつき気持ち悪いって……」

「うん。いった。だけどそれは、やっぱさちょっと偏見があつたわけよ。いるつていうのは知ってるわ、そういう人間が。だけど実際目の前にすると思わなかつたし、ましてやこんなに身近にいるとは思わなかつたし、つい口からああいつ言葉が出ひやつて……」めんよ

「いやまあああいう反応が返つてくる方が多いから、別に何ともないけど」

「携帯の番号と、アドレス教えてくれよ。俺のも教えるからわ」

そのあとの俊樹の返事は、意外なものだつた。

普段ならベッドの中に入つたらすぐ元に寝られる俊也なのだが、今晩はなかなか寝付かれない。

「もう、なんでこんなにあいつのことが気になるんだよ。つたくなかなか俊樹のことが頭から離れない。

今まで何度も女と付き合つたことがある。これでも結構もてるんだけど自負していた。

「その俺がだよ。なんで男とわざわざ付き合つかどうかで悩むんだ

よ

あんな奴、初めてだ。それが俊也の思いだつた。

「女でも、あんなに消極的な奴今いもんな」

昔の言葉でいう奥床しいといつものなのであるが、言葉の意味自体が死語になりつつあるので俊也のボキヤブリーリーにはない。

机の上に置いてある俊樹からの手渡されたプレゼントは、携帯のストラップだつた。中には手紙が添えてあり携帯の番号が書いてあつた。

『携帯の番号と、アドレス教えてくれよ。俺のも教えるから』

『この中に書いてあるから……。手紙読んでくれて、もしかつたら。俺、いつでも待つてるから』

そんなことをいついていた。

手紙の内容は、ほんの些細な日常生活のことから始まり、俊樹の性癖に対するカミングアウトが記してあつた。

幼い時に女の子に虐められて、それ以来女の子が怖くなり男の子にしか興味がわかなくなってしまったことなど会つて話をしたこと

が丁寧な文字で綴られていた。

そして一気に俊也に対する思いへと続いていき最後には、

『俺のこんな思いが通じるわけないと思つています。だけど伝えずにはいられなかつた。田渕俊也という人に出会え、ほんの一時の間でも同じ時間を共有できたことに、俺は感謝しています。つたない文章の君にとつては気分を害するかも知れない手紙を、最後まで読んでくれてありがとう』

まいつたなあーっと、頭をかきつつ手紙を持ったままベッドに寝ころんだ。

なにを悩んでいるのかが、俊也自身にもわからなかつた。友達、そう友達の一人としてあとほんの数日顔を合わせればいい。そう思えばいいものを、何故か悩んでいる。

「なんだろう。この気持ちつて……わかんないなー」

もやもやしたもののがずっと胸の中で燻つていて。それは収まるど

「 こうか、ますます増えていく。」

「 一つだけはつきりしていことは、俺はあいつが嫌いじゃないって事なんだよな。それだけわかればいいか。そうだよな」

「 そう今はそれだけの気持ちがわかればいい。明日会ってお礼をいおう。携帯のストラップにお休みの挨拶をして俊也は眠りについた。」

(後書き)

つたなごままの文章を、最後まで読んでください。ありがとうございます。  
これからも、ちょくちょくいろいろなものを随時アップしていくたい  
と思いますので、よろしくお願いします。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4417g/>

---

一月遅れのバレンタイン

2010年10月8日15時08分発行